

【大学等・一般の部】 最優秀賞

孫と私と野津町の自然

白杵市 村上 睦美



今年、双子の孫と三人で桜を見に何度も吉四六ランドに行きました。二千本の満開の桜は、息が止まるくらい綺麗でした。昼間は山一面が薄いピンク色に染まり、夜はライトアップされた桜が池に映り神秘的で言葉を失いました。綺麗だね〜と三人で桜を見つめたものでした。

何回目かのある日、「ばあば、誰もいない秘密の場所を見つけたよ」と嬉しそうに言う孫たちに連れられ、細い坂道を上り、たどりついた所は、眼下に野津の町並みが広がり、あちこちに菜の花の黄色が見えました。足元に小さな黄色い花を見つけ摘もうとする孫に「それは、キツネノボタンだよ。毒があるから触ったらだめだよ」と言いました。

この言葉は、私が子どものころ、父と二人でご先祖様のお墓掃除に行き、草取りをしている時に、父が私に言った言葉でした。

しばらくして、草で手を切った私に父は「これは、ヨモギだよ。こうして揉んで傷口に当てておくと血止めになるのだよ。ヨモギは草餅の材料や朱肉・もぐさの材料にもなるよ」と教えてくれました。そして、「カヤはね、恐る恐る触るから手が切れるのだよ。力強きぎゅっと握ったら切れないよ」とも言いました。やってみると本当に手が切れることはなく、すごい驚きでした。

父から教えてもらう一つ一つが私の知らないことばかりで新鮮で楽しみでした。

そういえば、父は春になると、私たち三人兄弟を野山に連れて行ってくれたものでした。わらび・ぜんまい・フキ・タラの芽を取ったり、ポンポン草の葉でポンと大きな音を出したり、オオバコで草相撲をしたり、飽きることなく遊びながら山菜摘みを楽しんだものでした。

つくしを取った時は、袴を取って茹でて卵とじにしたこと、フキは佃煮にしたこと。

そんな事を思い出していると孫が「足を切った」と言ってきました。とっさの事にカバンから傷テー

プを出して貼り、「ばあばが子どもの時は、ヨモギを揉んで傷口に貼って血止めをしていたのよ」と言う。「ふう〜ん。ばあばは、物知りだね〜」と褒めてくれました。あたりを探してみましたが、残念ながらヨモギは見つかりませんでした。

その瞬間、私は自分が父親から教わったことを娘や孫に伝えなければならないのに（自然との付き合い方、野草の名前や山菜の名前、食べ方など）なにも教えていない事に気づいたのです。これでいいの？私の代で止めていいの？と自問自答しました。

結局、私が育つ頃と今では半世紀以上も違うのだから、自然環境も変わり、人様の山に勝手に入るなどもっての外だし、どこに野草や山菜が生えているかも知らない訳で、教えようにも教えられない事にも気づいたのです。

しかし、山菜や野草を取ったり食べたりは教えられないかもしれないけれど、こうして美しい桜を見て綺麗だと感じる感性が育っていること、坂道を上る時に祖母の荷物を「持ってあげるよ」という思いやりの心が育っていることをうれしく思いました。

秋には、普現寺に紅葉狩りに行く予定です。

私たちのまわりにはたくさんの自然がありますが、目を向けなければ見えないものです。

せつかく、四季のある日本に生まれた孫たちに、四季折々の花々や木々の美しさを見る機会を与えてあげ、旬のおいしい物を食べさせてあげられたらいいなと思うのです。

元氣な孫たちに急かされて、遠くの菜の花の黄色を楽しみながら、桜吹雪の坂道を下りてゆく、自然豊かなところに住んでいることに改めて感謝しました。